

榊源次郎の民族音楽博物館建設構想

井上 裕太（野球殿堂博物館）

・本研究の出発点

1960年代後半に音楽学者・榊源次郎が民族音楽博物館建設構想について記した資料(徳永雅博氏所蔵)を新たに発見。

・研究目的

音楽博物館史における榊の構想の意義を明らかにする。

1. 榊源次郎に関する先行研究

劉麟玉らが、戦前・戦時中の、台湾・インド等の音楽調査を中心に、文献資料等を調べ、榊の民族音楽学者としての人物像を民族音楽学の視点から明らかにした(劉 2013など)。

⇒しかし、榊の1960年代以降の動向への言及や、音楽博物館構想に言及した論考はなし。

2. 同時期の音楽博物館論

わが国の音楽博物館の歴史を俯瞰すると、最も音楽博物館に関する注目の集まっていた時期は、田邊尚雄らが中心となった音楽博物館建設運動の勃興した1930年代後半であったと言える。戦後になると音楽博物館に関する論考は減少し、1960年代に至ると、田邊が楽器博物館についてその理想像を書き記した論考が確認される程度となる(井上2017)。

田邊は1967年、楽器博物館を美術博物館ではなく科学博物館の一種と定義付け、科学的視点から楽器を展示することの重要性を指摘した(田邊1967)。その上で、日本楽器を研究する外国人のための博物館であるべきという姿勢のもと、展示物として「直ちに演奏できる状態で展示された完全な形の楽器」、「品名・使用目的・製作年代・製作者名を表示した名札」、「楽器の演奏に使用する楽譜の例」、「演奏している容姿の写真、楽器構造を示す参考品」を挙げている。つまり日常の楽器の姿の展示にこだわり、楽器のみならず楽譜や楽器構造を示す模型等を組み合わせることで、楽器の演奏方法や雰囲気が如実に伝わる仕組みを理想としたのである。

3. 榊源次郎の民族音楽博物館建設構想概要

榊は、1968年にIFMC第20回国際民族音楽会議が開催されるのを機に、前年である1967年に民族音楽博物館建設構想を表明した。その後、国際民族音楽会議の開催は中止となったが、榊は博物館建設構

1943	1	26	a. 台湾音楽調査のため台湾に滞在(5月2日)。 b. 「印度音楽見聞」が「音楽文化」(1巻1号)に掲載される。 c. 台湾民族音楽調査報告会に出席
1944	7	7	a. 「印度及び南方の民族祭典と音楽文化」が「音楽文化」(2巻7号)に掲載される。
1945			a. 秋、榊源次郎が組織した日本民族芸能研究所では研究発表会が行われた。
1949	12		a. 榊源次郎を含め、今井通朗、岸辺成雄、吉川英史、瀧澤一、田辺秀雄、林謙三が集まり、協議し、東洋音楽学会の機関誌の復刊を働きかけた結果、文部省の補助金が交付される。
1950	5	28	a. 東洋音楽学会理事。ユネスコとの提携を担当する。
1951			a. 原稿「Investigation report on Formosan folk music: A documentation & theory, with documental records album」を執筆。 b. 東洋音楽学会理事。
1953	7	15	a. 国際民族音楽舞踊祭に出席。
1954	6	6	a. 東洋音楽学会理事。
1963			a. 編集したレコード《世界民族音楽集成》がビクターから発行される。
1995			没

表1 榊源次郎年表(劉 2013より、1943年以降の部分を取載)

想を抱き続け、計3回にわたり、その構想について言及している。そこで、それらの内容について時系列に沿って紹介する。

(1) 『日本民族音楽協会々報』No. 1 (1967年10月)

・目的

日本民族の慧智をこめた日本伝統音楽舞踊とその風俗資料の有機的鳥瞰蠟人形パノラマ展観場を中心に、世界の民族音楽文化資料をもって世界史に占める民族音楽文化の位地を正し、文化創造の喜びとその共感を通して、世界を結ぶ豊かな情操を啓発し、健全な精神生活を培うこと。

⇒日本の音楽文化と世界の音楽文化を紹介。

・実施事業

①民族音楽文化コンサルタントの開設。

②民族楽器、民族服飾及び録音資料並びに文献図書資料の集取、交換及び刊行。

③国内及び国外における民族音楽文化資料展の交歓展観及び公演会の開催。

⇒国内外の諸機関と連携し、多様な事業を実施する構想。

・施設の規模

建築様式は、日本千古の伝統を誇る校倉造りとし、近代設備の完備した気品高く威容をもった地下一階地上三階建てとする。

地下一階 資料倉庫、資料整備室

一階 特別展観場、休息室兼食堂、野外演技場

二階 実験劇場式展観場(ロンドン・マダム・タッソー博物館蠟人形パノラマ式展観)

三階 フィルムライブラリ、レコードライブラリ、文献図書室、研究室

(2) 『日本民族音楽協会々報』No. 4 (1968年4月)

この中で、「日本民族音楽博物館」の準備委員会発足を表明。

・目的

自らの魂を樂しませ周囲を明るくし、郷土をまた国を明るくする民族音楽文化の現代における価値を紹介し、日本民族音楽の再創造の喜びと伝統文化財に対する自覚と尊敬の息吹を吹込み、豊かな感性を培い健全な精神生活を啓発する。

・基本的構想

「いつごろどのようにして人類の中から日本民族音楽文化が現れたか」「日本民族音楽文化は世界史上確固とした地位を占めることができるか」、この人類文化史の縦横の二点を主題として、千数百年にわたり繰り上げられて来た日本民族の慧智をこめた伝統日本音楽とその関連文化との特色ある文化財が、戦後心なくも散逸しつつあることをおそれ、これを収集保存し、その有機的展観を主軸として世界の民族音楽文化資料との比較展観により文化遺産の歴史的発展を辿り、民族音楽文化への共感を通して世界を結ぶ豊かな情操を啓発し世界の平和と繁栄に寄与することを期している。

⇒日本の音楽文化を中心とした内容に変化。

(3)「日本民族音楽博物館設置草案」(1968年11月)

国際民族音楽会議の開催中止決定後の原稿。推敲の痕跡が確認できる。

・目的

日本民族音楽文化資料を中核に、原始未開の自然民族から文明開化をなし遂げつつある文化民族にいたる、世界の民族音楽文化の視聴覚資料の総合的、有機的比較展観の一大パノラマ劇場とし、(中略)日本民族音楽文化の再創造とその関心を通して世界と結ぶ、国民情操教育の場として、また民族音楽文化研究の機関として世界の繁栄と平和に寄与する。

⇒日本の音楽文化を核として世界の民族音楽文化を紹介。

・事業

- ①民族音楽文化に関する資料の収集、保存及び展観。
- ②日本民族音楽文化に関する内外への普及宣伝。
 - (イ) 日本民族音楽文化資料展の交歓開催
 - (ロ) 模範演技、講習会等の交歓開催
 - (ハ) 図書、録音物、録画などの刊行頒布並びに交換
 - (ニ) 資料模型、人形、服飾等の模作頒布並びに交換
- ③日本民族音楽文化技術保持者の福利厚生。
 - (イ) 演技権(隣接著作権)の保護組織の推進
 - (ロ) 伝統技術錬磨、地位向上のための相互扶助組織の推進
 - (ハ) 楽器、服飾、小道具等の修理、購入資金の造成組織の推進
- ④国際観光の一環となる日本民族音楽文化観光圏の樹立推進
- ⑤その他目的達成に必要な事業

・施設の規模

- ①土地面積 約 3,305 m²
- ②建物面積 約 3,305 m²
- ③建築内容
 - 地下一階 資料倉庫、資料整備室、電機室
 - 一階 パノラマ展観場、休息室、事務室
 - 二階 特別展観場、演技場、録音盤及びテープ視聴室
 - 三階 図書閲覧室、研究室、スライド及び映画試写室

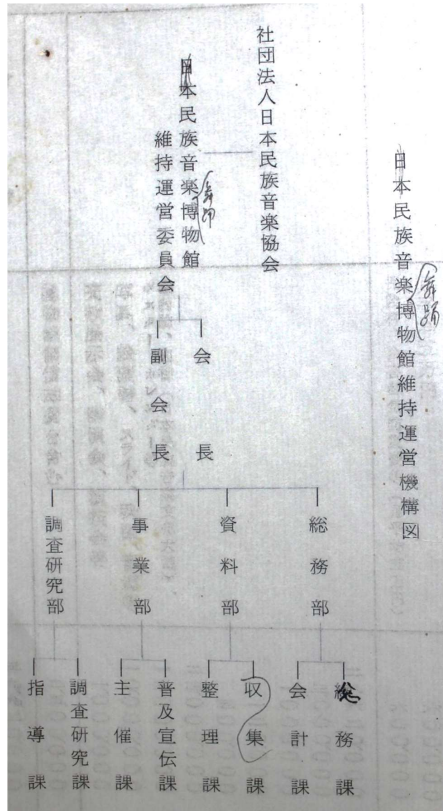


図1 民族音楽舞踊博物館維持運営機構図(日本民族音楽協会編 1968.11より転載)

・榊による推敲

原稿から、榊が草案に手書きで修正を加えた痕跡が窺える。

「日本民族音楽博物館」→「民族音楽舞踊博物館」

⇒①日本のみならず世界の音楽を対象に。

②音楽のみならずそれに付随する舞踊をはじめとした民族文化を紹介。

4. まとめ

同時代に田邊の提言した論考では、音楽を科学的視点から捉え、展示を行うことを理想とした。楽器の構造等を分析することで、音楽の科学的分析に主眼を置いた構想と言える。一方、榊の音楽博物館論は、音楽を舞踊と同列で紹介し、世界各国の民族文化を紹介するものであり、田邊とは対照的である。榊は、蠟人形を用い各地の舞踊を可視化する試みや、野外演技場を設け演奏や舞踊の実演を想定する等、音楽を中心に据えるのではなく、舞踊と同列に扱うことで世界の民族文化として来館者が受容できるよう様々な工夫を検討した。つまり、民族文化の1つとして音楽を捉え、民族学的分析に主眼を置いた構想と言える。その根底には、世界の民族音楽について、各地の風俗や舞踊も併せて学習することで、各地の民族への理解を深め平和へ寄与したいという強い意思があったと考えられる。博物館の建設には至らなかったものの、右図のように推敲を重ね、綿密に練った榊の民族音楽博物館建設構想は、音楽博物館を論じる上でも一つの指針となり得るものである。

最後に、本発表にあたり、資料をご提供いただいた徳永雅博氏にお礼申し上げます。

参考文献

井上裕太 2017 「音楽博物館論史」『博物館学史研究事典』(青木豊、鷹野光行編) 雄山閣 pp.186-191
 田邊尚雄 1967 「楽器博物館の条件」『日本音楽』第23巻4号 日本音楽社 pp.1-3
 日本民族音楽協会編 1967 「いそげ世界を結ぶ民族音楽博物館の建設」『日本民族音楽協会々報』No.1 社団法人日本民族音楽協会 pp.4 (徳永雅博氏所蔵)
 日本民族音楽協会編 1968.4 「世界を結ぶ日本民族音楽博物館」『日本民族音楽協会々報』No.4 社団法人日本民族音楽協会 pp.3 (徳永雅博氏所蔵)
 日本民族音楽協会編 1968.11 「日本民族音楽博物館設置草案」(徳永雅博氏所蔵原稿)
 劉麟玉 2013 「民族音楽学者榊源次郎再考—日本とインドの間の足跡を辿る—」『奈良教育大学紀要 人文・社会科学』62巻1号 奈良教育大学 pp.97-104